

^ 13  
1186  
1





門 513  
號 1186  
卷 1

~13  
1186  
15

龍  
鳳  
呈  
祥  
萬  
壽  
無  
疆

66



个 13  
1186  
1-5



想山著聞奇集序

藏書

日月星辰。晝夜晦明。造次顛沛。天下之人。仰觀而俯察焉。而至其不測之變。則或昧焉。山川草木。鳥獸與魚。跋涉往還。視聽而畜養焉。而至其不測之化。則或惑焉。佛神感格。善惡報應。華竺經傳。紀述而贊揚焉。而至其不測之應。則或疑焉。蓋疑者。其知識之劣也。惑者。其視聽之狹也。

序



昧者其問多之淺也。三母想山篤學而博涉。性敏而善書。夫書之為道也。摹範天地陰陽。以傳造化不測之秘。乃在自已神腕之間。故至事物休咎。因果報應之迹。無有不寸管一揮。掌握其霸柄者。謂出其優遊漁獵硯山墨海之餘力。而然者非哉。今方統其所纂述之異聞奇觀。數百千條之中。特抄錄核實著明。而近人情者。為五

十卷。題曰著聞奇集。成請序余。告想山曰。佳矣。此篇隨聞隨筆。故不緣飾文之浮華。靡麗之態。做事實達意之法。而天地之恢宏。萬物之繁衍。報應之微密。莫不細論詮考。纖悉著明矣。莫道俚語猥駁。蕪辭冗長。不足采觀焉。世人因以擴充其見聞。覺知則昧者明矣。惑者決矣。疑者信矣。善哉。想山不啻筆鋒入于木。著書亦



上梓。自非學識老鍊。詎得能然耶。每事輯錄。絲  
解縷折。似微而著。然則其題之於著聞。名固不  
空。或曰。想山腕力有神。此篇總括造化奇機。遊  
戲書道三昧者。豈不其然哉。豈不其然哉。

嘉永五年歲次己酉嘉平月

方外子無黨社主僧允識



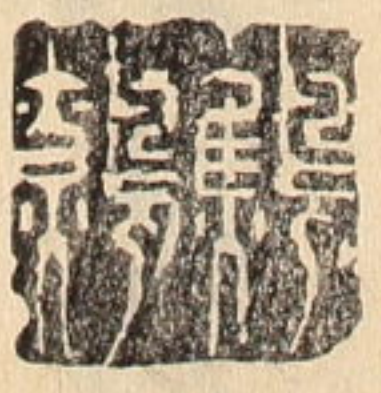
白<sup>コロ</sup>其<sup>ス</sup>動<sup>ス</sup>愚<sup>ク</sup>之<sup>カ</sup>也<sup>ラ</sup>老<sup>シ</sup>部<sup>ニ</sup>而<sup>シ</sup>為<sup>ス</sup>  
少<sup>シ</sup>老<sup>シ</sup>猶<sup>モ</sup>多<sup>ク</sup>老<sup>シ</sup>延<sup>キ</sup>妄<sup>ニ</sup>說<sup>ス</sup>唯<sup>ニ</sup>一<sup>カ</sup>  
時<sup>ニ</sup>之<sup>ニ</sup>不<sup>レ</sup>目<sup>ク</sup>耳<sup>ク</sup>之<sup>ニ</sup>見<sup>ス</sup>想<sup>ス</sup>山<sup>ノ</sup>其<sup>ノ</sup>中<sup>ニ</sup>集<sup>ル</sup>  
研<sup>ル</sup>究<sup>ス</sup>其<sup>ノ</sup>物<sup>ヲ</sup>以<sup>テ</sup>記<sup>ス</sup>其<sup>ノ</sup>名<sup>ヲ</sup>實<sup>ヲ</sup>可<sup>ク</sup>謂<sup>フ</sup>  
勤<sup>ク</sup>字<sup>ヲ</sup>以<sup>テ</sup>支<sup>ス</sup>強<sup>ク</sup>其<sup>ノ</sup>奸<sup>ヲ</sup>誠<sup>ニ</sup>能<sup>ク</sup>不<sup>レ</sup>以<sup>テ</sup>  
仁<sup>ヲ</sup>義<sup>ヲ</sup>以<sup>テ</sup>教<sup>ス</sup>訓<sup>ス</sup>之<sup>ニ</sup>實<sup>ニ</sup>猶<sup>モ</sup>以<sup>テ</sup>地<sup>ノ</sup>妖<sup>ヲ</sup>薩<sup>ヲ</sup>



之爲披与友者其多者也其少者  
教二世少補其因重其事以  
室法序之書云

義之爲已爲也反

尾張 佐々木庸綱撰



凡例

予著年より固不見る如子徳万神教子徳系よ  
乃大然りしと年月を後より後ハ次中り  
忘りし記憶室表臆胸に腐爛も故に跡跡を顧  
物竹根と筆記の正子録の事一固友の意  
若きりし思ふ而この事あると又之勿謂  
今日不学而有来日勿謂今年不学而有来年日月  
逝矣歳不我定嗚呼学老矣是誰之愆と吾人の戒も  
僅に得るを銘ともし得りぬる後意とす  
固と跡り多しと去らし来年の杖類りに思ひ  
難談秘談源秘談の四系とすて書記より並ん  
但此草稿なり漸五十巻よるびより固志の人







と斯之記得たり

一 柞吉未震矣と信らざるは心の心は有奉と安んじり  
靈夜平性ハ自然の成りて其の成りて進出あること  
ありて故と以震怪と見らるる執疑する人多く更り  
寄らざる人こそ又不思議とらるる能感伏たり幽明  
二世乃理と信らるることありたも其を怪矣と又道成  
其一事奉らるる事難く其身と信らるる事多し  
物らへ一情むして事其人をせんとせんと其無の慮と  
勢をまむり強く信らるるに信らるる人其意は  
まゝのものと異にも唯い篇ハ彼前見らるる所の遠いこと  
事と恐むる文飾なりある事一而已  
一 是書る思ひまゝ又人の信らるるを安んじり或いは人の

筆記と見らるるに記しむる多く用ゝ時代前後と  
ワらず混れりて殊に十餘年来書成るとある後不  
次第に綴りて其後冊子となりて其元來の書ハ  
勸善懲惡のなる子孫に示さんと思ひわたり  
筆記のつらなりあるに似ては書の文飾の意  
若同集と擬しめ書らるるものも似て又新著耳集の  
似て書らるるものも似て素より文飾とていふ  
筆せしものも似て唯信通西已と思ひて信らるる意と  
加へて時よ信らるるに似て書集成るる進の事  
りあり故に著函せし書に似て故に勿論  
博識の君子よ示さんと思ひて書らるるものも似て  
批とて知いし事なり



一 此書ハ元來一ツノ虚法ト思ハ書載セシメテも  
 然レト云ヒテ嘘ト云クハ何レモ或ハ虚成事又ハ實事也  
 云々云々ハ形更其事ノ要チラザルと云フ人  
 ナリ且又活ノ義理筋道ノ外情態アルハ必カマテ  
 煩雜ト厥レビキ修リ書記セシハ其實ノ貫カセ  
 兼ハ先導心ノ一ツノ部僅重復ト有ク事ナリ  
 一 今ハ昔傳リト成居ル事或ハ古人ノ筆記成事  
 今ハ又ハ傳レテ今ハ活ハ今是ト為應行  
 然レト云ヒテ嘘ト云クハ何レモ或ハ虚成事又ハ實事也  
 云々云々ハ形更其事ノ要チラザルと云フ人  
 ナリ且又活ノ義理筋道ノ外情態アルハ必カマテ  
 煩雜ト厥レビキ修リ書記セシハ其實ノ貫カセ  
 兼ハ先導心ノ一ツノ部僅重復ト有ク事ナリ  
 一 今ハ昔傳リト成居ル事或ハ古人ノ筆記成事  
 今ハ又ハ傳レテ今ハ活ハ今是ト為應行  
 然レト云ヒテ嘘ト云クハ何レモ或ハ虚成事又ハ實事也  
 云々云々ハ形更其事ノ要チラザルと云フ人  
 ナリ且又活ノ義理筋道ノ外情態アルハ必カマテ  
 煩雜ト厥レビキ修リ書記セシハ其實ノ貫カセ  
 兼ハ先導心ノ一ツノ部僅重復ト有ク事ナリ

一 此書終ノ一事トシテ意ノ及ブ文ヲ行ハシメ  
 事實ナリ 齟齬セザル極リ記一書ナリ活シテも  
 事多ヲ一理ト又極リなるも色バ事實  
 遠ハ居ル事ト有テ一書ホの分ト自余ノ事  
 及ボ一書一理ト又極リなるも色バ事實  
 一 去信ノ口碑ハ想テ讀ムルハ是レト云難  
 朝リト云ヒテ嘘ト云クハ何レモ或ハ虚成事又ハ實事也  
 云々云々ハ形更其事ノ要チラザルと云フ人  
 ナリ且又活ノ義理筋道ノ外情態アルハ必カマテ  
 煩雜ト厥レビキ修リ書記セシハ其實ノ貫カセ  
 兼ハ先導心ノ一ツノ部僅重復ト有ク事ナリ  
 一 今ハ昔傳リト成居ル事或ハ古人ノ筆記成事  
 今ハ又ハ傳レテ今ハ活ハ今是ト為應行  
 然レト云ヒテ嘘ト云クハ何レモ或ハ虚成事又ハ實事也  
 云々云々ハ形更其事ノ要チラザルと云フ人  
 ナリ且又活ノ義理筋道ノ外情態アルハ必カマテ  
 煩雜ト厥レビキ修リ書記セシハ其實ノ貫カセ  
 兼ハ先導心ノ一ツノ部僅重復ト有ク事ナリ



一人名地名と記しに勢筆としてあり兼る多又  
其人其名の正誤を是居るとして或人又ハ何某或  
某の村を記し遊する有且文字の志を兼る  
うか文字あり記し遊する是固推のたひと思ふ  
也

一 予ハ尾陽乃産故冊中に我云くと書遊するハ  
本國の本なり中年之後東都に任する事又  
故といは居る事又多し一ハ國と名兼りて  
遊る地名と云ふハ皆江戸の事なり  
一 予ハ世學後見博く書と見え先人の論詠未  
有事と云ふ又右來回板の讀者事おも兼り  
物見通見及つるとハ其似歎と筆く後遊し休る也

一 予ハ且東遊記西遊記又ハ著聞集の類ハ人の遊  
者ハ知居る書の色と量業のかり安らるよ書  
たり遊と有強く意を加ふハ何れと  
一 予ハ胸中ハ記憶する奇談雜俎あり且目録  
安らるの味と量りゆるまハ己後ハ屢書記を  
遊しと思へとも勢筆の餘暇多しとる人自  
借事又多忙ありとる外ハ志き道も  
以冊の毛筆ハ又ハ遠くハ志き入平ハ  
一 予ハ思ひとる雜一鳴呼方と己り  
周遊とやゆらん

嘉永二年己酉夏

想山齋主人誌



神靈驗神異の事一 怨多くと  
 大神宮の所産者あり一 糸りく 御幣法授の諸國へ  
 活くせり半初種くの奇瑞いともう 且國への  
 人成事く 糸指う 想く 人氣の曹くまう 拵待  
 秘のあとのせし 奇秘あを 安るふ 支考く 集録し  
 多し 是と 平淡の 巻首くして 五巻さう 是のい  
 けと 是と 思入子 細首く 右の 五巻を 後にく 本ま  
 を やく 些閑き こと びい 五次冊の 方より 新上本  
 をり 年

庚戌孟春

青山直意

想山著閑奇集巻のき

目録

- 一 出雲大社遷宮の時雲出る事
- 一 天狗の怪妙 兼 物實録の事
- 一 鏡裏く 名付く 事異奥の事
- 一 晴葉所靈験の事
- 一 頼馬の事
- 一 葛蒲の根奥く 化まふ事
- 一 毛の降さふ事
- 一 白蛇靈異と 類く 事
- 一 物乃 行列 兼 鎌と たり 事
- 一 附火と 焼く 事





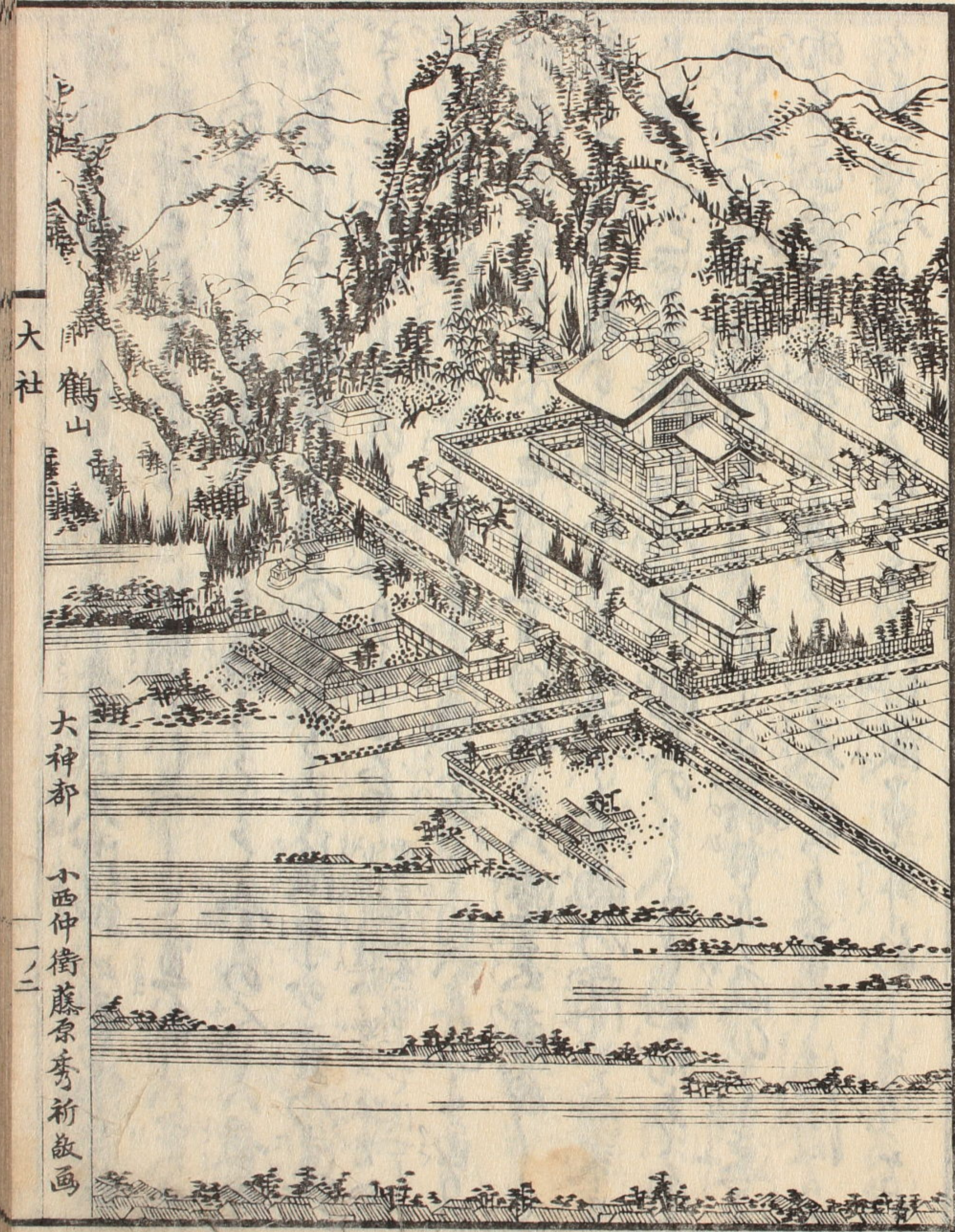
一人の金と掠丸ある鞍の雲にせめ殺さる事  
 附出さるるの事  
 一吉夢應と願ふ事

出雲大社遷宮の時雲出る事

出雲の國の大社に古昔より甲子の年と遷宮成る事  
 事とて大社の宮大工神門恒進と云人長常とて寛政  
 の末の甲子八十一歳の月ありり由此人法ゆぐ  
 詔曰此大御社の遷宮と云吉と云八雲山の白雲  
 懸懸出渡御と覆の事も奇瑞と皆人ねむる事  
 事とて手も延享の遷宮の眼前ねむる事  
 此事とて今其瑞とねむる事希にありぬ程  
 長命願ふる二夜神瑞とねむる事  
 又御まゝ命をねむる事  
 今を祖父の常々示すは神瑞ハ詔り傳ふ事  
 事とて大工事誓り志す事



八雲山

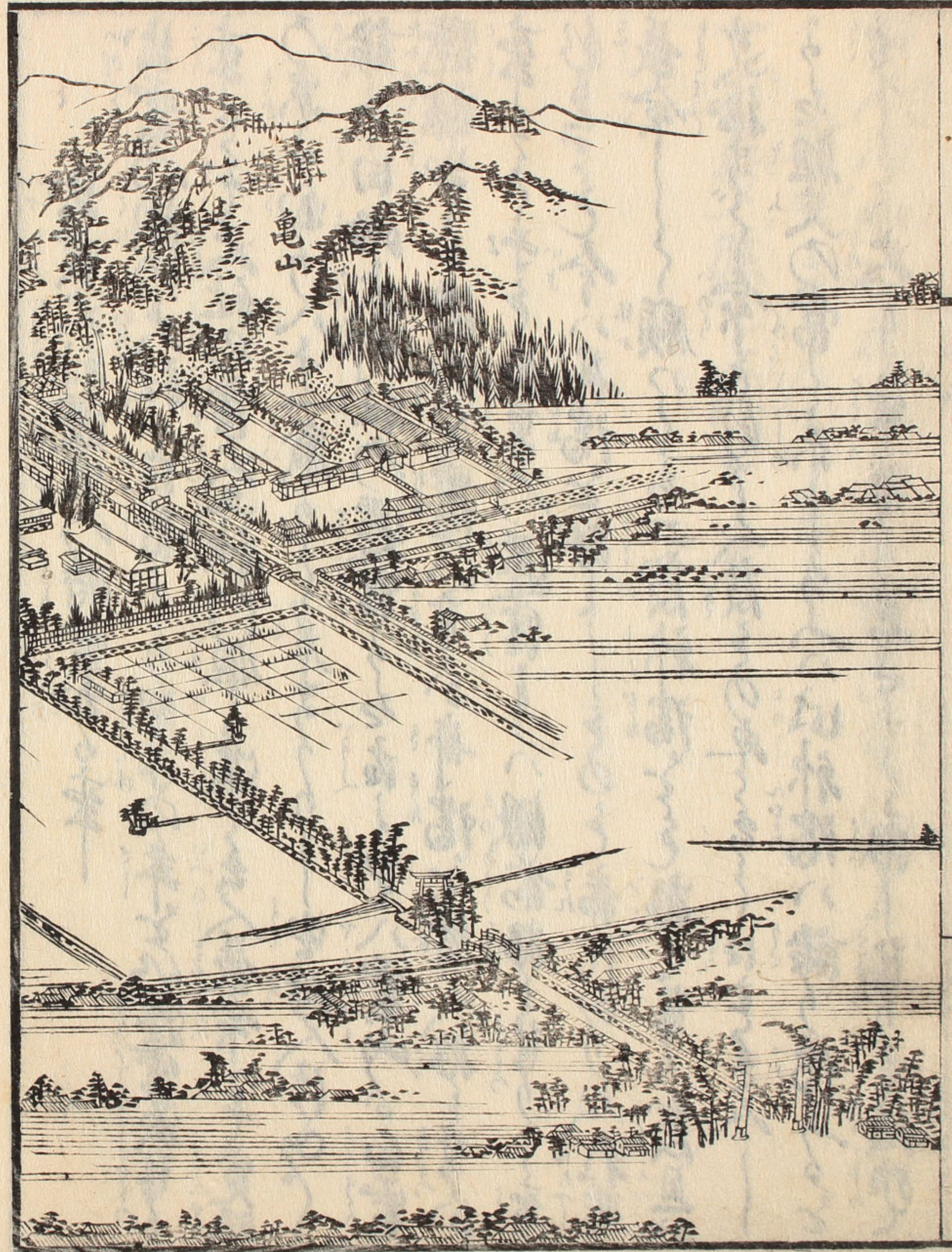


大社  
鶴山

大神都

小西仲衛藤原秀祈敬画

一八二



亀山







神靈なるもごとく古より語り傳ふるものも一  
旧記と見てもざりしに眼前におもひし今も  
侍らむに社家行末の世に具はぬに記し  
は雲入出のり出雲に云國名を記し素戔嗚尊の  
八雲三の神祕ありしは山の事也天代の事  
事ハ博識り漢の教を習せむと唯安まると  
記しぬ

業むらり黃帝之位を登りしは  
り高き陽と影とせしは雲の宮と傳り又雲書と  
造りの事日記の者一人の事たるも  
上古の事故虚しくも人々の事たるも  
なり又不思議と思ふ人もありしは

然るも事なりも古くは云行と和漢同候と云つ  
は時造りの事と瑞雲書と云ふも古くは故書  
此書云り治雲量雲高貴雲教雲或は宗白  
黒木の差別有り秘傳と云ふ道り傳へし  
の雲と時りあり色々の差別も有るに社  
の靈應ハ人智より福も成りしは唯  
拜敬と云ふ事あり

天物の怪妙并物質餘の事

天物の奇怪妙変ハ元人の知悉し事なり人智  
量よりしは種類を極る者事と思ふ  
國所りよりてハ前業と云ふも思ふ

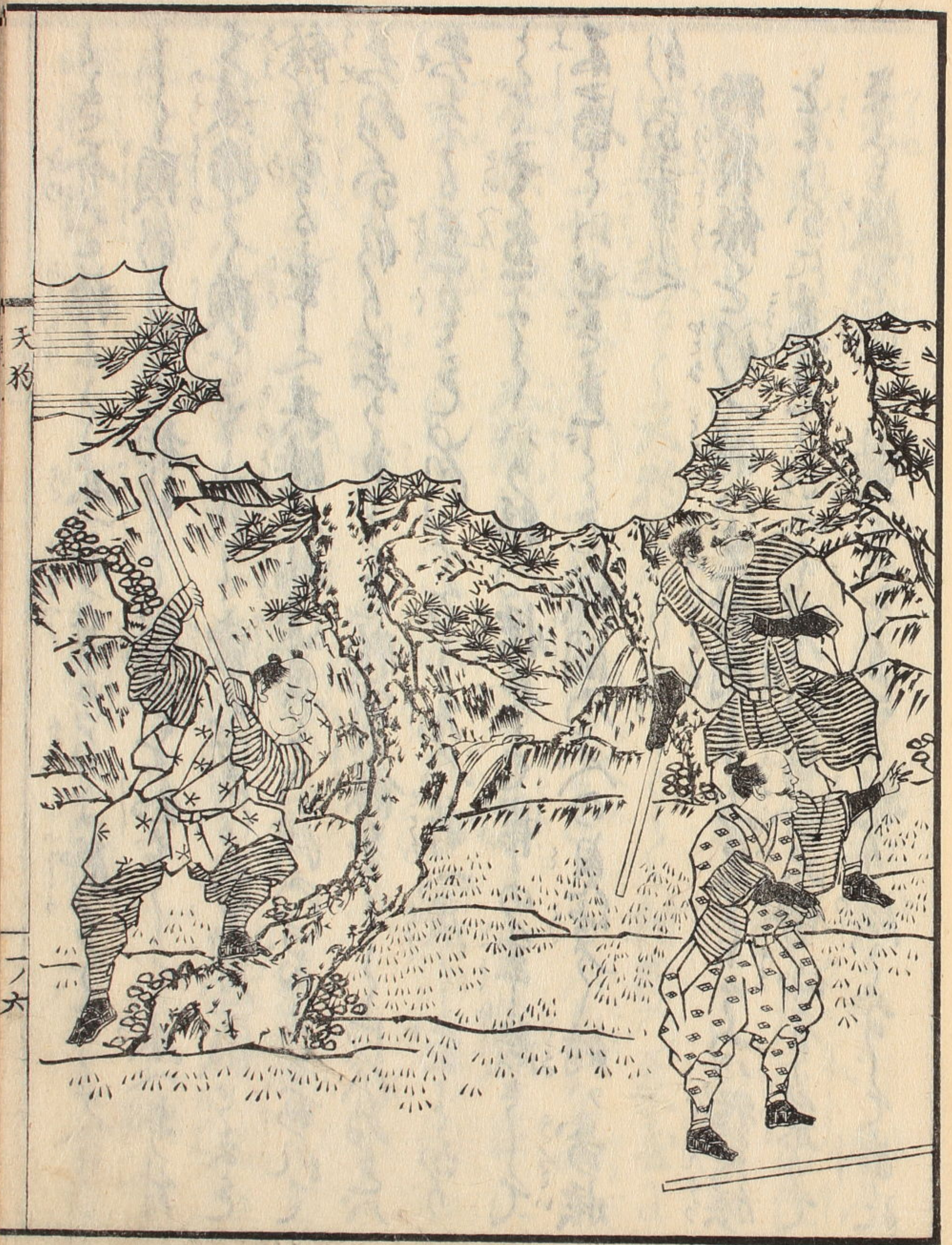


西ノ北義濃郡と那武依郡東奥濃實茂郡惠那郡  
色ノ天狗ハ多所業一糸のり〜と〜と〜と大槪同松ノ  
性と〜と〜と〜と先山の本と伐時ハ初〜芥と入る  
物實解〜と〜と松〜山神ハ供へ〜と松ハ宮〜  
のち本と伐之物〜と〜と種〜の性〜中〜本と  
伐事成難〜と〜と所〜本と伐也〜山〜折〜  
物實解〜と〜と齋〜は〜松〜性有〜本と伐事  
成〜と〜と松〜一松〜と〜と多〜  
松道具〜と〜と又〜居〜奇ノ頭と接九或ハ心と  
大本大石と落〜音と〜と甚〜時ハ山と〜と崩〜  
義〜と接ノ勢と〜と松小性ノ内ハ甚〜と〜と  
垂〜物實解〜と〜と神と〜と芥〜性〜と〜と

本と伐事成時濃別武依郡志津野村の  
三里村の平山と伐〜と〜と是ハ山と云極の〜と〜と  
松〜古樹の覆ハ繁〜と〜と松林〜と〜と村廣〜の  
小松林ノ平山〜と〜と中〜天狗の〜の位〜と〜とハ鎌倉  
思ハ〜と〜と物實解〜と〜と〜と本と伐  
〜と〜と松〜と〜と芥〜と〜と皆接〜と〜と芥ノ頭と  
〜と〜と〜と天狗出〜と〜と道具と〜と金と〜と悉  
先〜と〜と是〜と〜と中〜と〜とハ仕事〜と〜と物  
實解〜と〜と〜と〜と〜と〜と〜と〜と〜と  
〜と〜と〜と山神と〜と〜と〜と〜と〜と〜と  
聖旨ハ〜と〜と本と伐〜と〜と一年ハ村の〜と松と  
〜と〜と予ガ下男〜と〜と〜と聞〜と〜と本と伐居〜と



天  
初



六



美  
彦









獲り入るゝ大本と伐無の者一山荒出せ故  
所とら舟早く候と捨籠入く事一々一  
りり支るると以東ハ右邊よりハ日けく意と出く切  
り供の事と苗木後の山有竹某の世なり  
又戦後の國浦原郡磐石郡の杣人の園りこた入  
本と伐る時其一枝と折其れふあり考く是れ  
索くきまハ大本あどりハ珠りま索者由之又戦後  
の國出羽の國あどりハ杣人の園りこた入  
入時ハ鱧魚と云々と懐中一入あり大本と伐り  
難儀なり時を供れを難う安く伐得又得人も  
終日得く得物ある時ハ山の林ハ新橋く鱧魚の  
頭と少く見せりけく歎と得せりあふく感意あせ

のち全形と見せありせん新ふえある時を  
速り感意者事とぞと中く軌ハ行をぬと  
くくも感意の時ありまハ感意とあくと云り  
鱧魚と名付くハ異臭の事  
我虎張の國知多郡横須賀四代官の下役者居竹本  
文化年中回而主執の時漢人の捕る臭を形金く鏡  
のくくも感意の時ありまハ感意とあくと云り  
鱧魚の臭捕る事ハ昔漢りのくくも感意とあくと云り  
海邊よりハ名を志まぬ臭魚と折取捕均る事あれ  
くくも感意ハ主用の奇ありく者くくも感意とあくと云り  
くくも感意ハ主用の奇ありく者くくも感意とあくと云り  
筆記り鱧魚と云條有く享保の初め房別浦と云

鏡魚

一ノ八







捕をふりしめ江戸小田原町の着店へ持さる  
先のくきを賣る金辨丸くき一渡一三尺計  
印めつてくきその多きくつかつて賣代各  
一似より虜つて又いさごり也一版のト少一白  
脊く版の中守長さ八尺計り一轉りく又八尺よ  
く虎くきとあつた。賣者くくく之供ひて見え  
くくくを名とある人け一主形ち境よ似くくハ境魚  
くくくを名とある人け一主形ち境よ似くくハ境魚  
と見えハ南方り境賣る南の北事境の也一と  
けり着は賣の事くくくとあふやくくり陳海英  
お志の賣ハ多合ふり成るくくくは龍天社の境魚ハ  
大り遠い。賣之惣きくく先同日の俵り新記

変々後繼の一助とて

精薬師靈験の事

市谷谷町自覚院東海山の先恒念所院ハ隱居く  
後世の事子の恒誠なり居るくく悔康申堂常態  
寺(回店)病と療一居りくくは念所院の  
小姓ハ山田忠三郎と云々今年天保九十三歳なり一が  
去周年の冬より不審も是小病出来たり恒  
出来増りく六月は印りんも是ハ大小百余出来  
大成ハ豆粒よりと大きく小指の預程の分も多  
出来く目見苦愛たりたる故念所院の事あり  
くは目黒の精薬師ハ靈験何したるく創く病の  
事ハ新より獲り育く安及下りは佛ハ平癒の







記ぬは薬作佛の慈覺大師の作く言傳く天宮宗  
の法統院と云ふ安室のり又予が知色よ高橋り  
後村智山と云ふ醫師有前の坐と受くつふか先年  
巴谷の庄町一丁目り住居せし時因丁に大工の某と  
云者有る疾醫受出まゝ種依りりつふ人も勸め  
己と因りも是も目黒の精薬作(精と一生断との  
うゝ願とうけ不目うゝ悲く愈きり種りり  
まゝと申年種と云う大勢合ふふ取りて精と  
食故友達共のりよは日前ハ先頃疾の出まゝ  
と云因り精薬作(願と慈精ハ一生断物と云  
まゝと云うゝハ形もや結むまを大之言く云ふ精  
あゝハ形と云わゝのり精ハ食まゝは居てハ

不自由故精と云ふ是は八か者く同く事ゆゑ  
精と云うゝりま替り精ハ生活食まゝと云故身  
儀のもの形と云利益を忘るゝのりも法  
の荒云と世教と故き席り居合と云者も  
皆く真と醒る増く思ひりり又も疾忽ち  
元の如くり出来返りり種依りりせと云の毒  
り思入者も形く人々事く薬作の所野形か  
事と云指ぎ後右の大六か何  
せと云又も智山ハ右の町内と精完せし故路の  
事と云へどこの事と云くも事と云くも急角  
悪事や世法成事ハ致さうと云ものよ何れ  
あゝり人の不義不法の事と云も席ハ居合



居るにまゝ別見おぼせぬがゆゑに、勿論の事  
童蒙の心へ能く得る事多し。此世に生れしをば、或人  
牛込原町の木挽源兵衛と云ふ者、此世の世に  
大坂の事あるが、此木挽仲間、若くは病と云  
病氣平癒と云ふ折、此石と折、此石と折、此石と折  
と云ふ事、此石の食、此石の食、此石の食、此石の食  
し、此石の食、此石の食、此石の食、此石の食、此石の食  
之類、此石の食、此石の食、此石の食、此石の食、此石の食  
病若くは全收せし、此石の食、此石の食、此石の食、此石の食  
小石の食、此石の食、此石の食、此石の食、此石の食、此石の食  
ども、此石の食、此石の食、此石の食、此石の食、此石の食、此石の食  
さし、此石の食、此石の食、此石の食、此石の食、此石の食、此石の食

此病再發、此石の食、此石の食、此石の食、此石の食、此石の食  
是の文、此石の食、此石の食、此石の食、此石の食、此石の食  
又、此石の食、此石の食、此石の食、此石の食、此石の食、此石の食  
権現、此石の食、此石の食、此石の食、此石の食、此石の食  
緩急、此石の食、此石の食、此石の食、此石の食、此石の食  
多し、此石の食、此石の食、此石の食、此石の食、此石の食、此石の食  
時、此石の食、此石の食、此石の食、此石の食、此石の食、此石の食  
物、此石の食、此石の食、此石の食、此石の食、此石の食、此石の食  
に、此石の食、此石の食、此石の食、此石の食、此石の食、此石の食  
断、此石の食、此石の食、此石の食、此石の食、此石の食、此石の食  
物、此石の食、此石の食、此石の食、此石の食、此石の食、此石の食







馬方と彼世の馬の事ハ即ち切者之び者云  
ギバハ虚ハ實ハ存也云々近江の國  
大津の東河の穢多の浪死〜ギバと成馬と覺  
せし由去俗の傳り口を以て云り相も成りしを  
見り知り居りや〜同り存居り〜昔もそれハ  
如何成形ちの事ものや〜同よ由虫の如く〜  
の心も馬り〜素も女も〜櫻〜郷の衣被と云々  
金の櫻治と冠り被着のきれ〜ふやうに天のひら  
と流るる〜馬ハ忽噴濁〜と切首と上げ  
只事あるぬ声〜嘶きや〜其時ギバの素も  
成馬の前と我るの口の方〜跡と我馬の  
耳より鬃の方〜踏〜馬の面り〜ひ〜と懐抱

は時彼ギバの煙女必あり〜知〜等〜  
消共や〜さ〜馬ハ右の方〜と及〜  
〜又成り即死する物〜不案内の馬士を  
多〜ハけら〜仕舞中〜故り常に馬士  
事纏〜と云〜居り〜は馬士も纏〜  
羽織〜と云〜福付〜と云〜或ハ風呂浦  
又〜薄圍葦笠や〜竹〜と衣被〜  
事〜羽織居り〜は是ハギバの指さぬ  
口〜ぬギバ室〜馬の預り〜  
た〜ぬ〜と死居〜彼馬士も纏の右の袖  
〜とぬ〜たの袖ハは深〜  
〜馬の首〜ぬ〜馬ハ右〜









顏馬

一ノ十七



三  
張  
筆  
曹  
翁

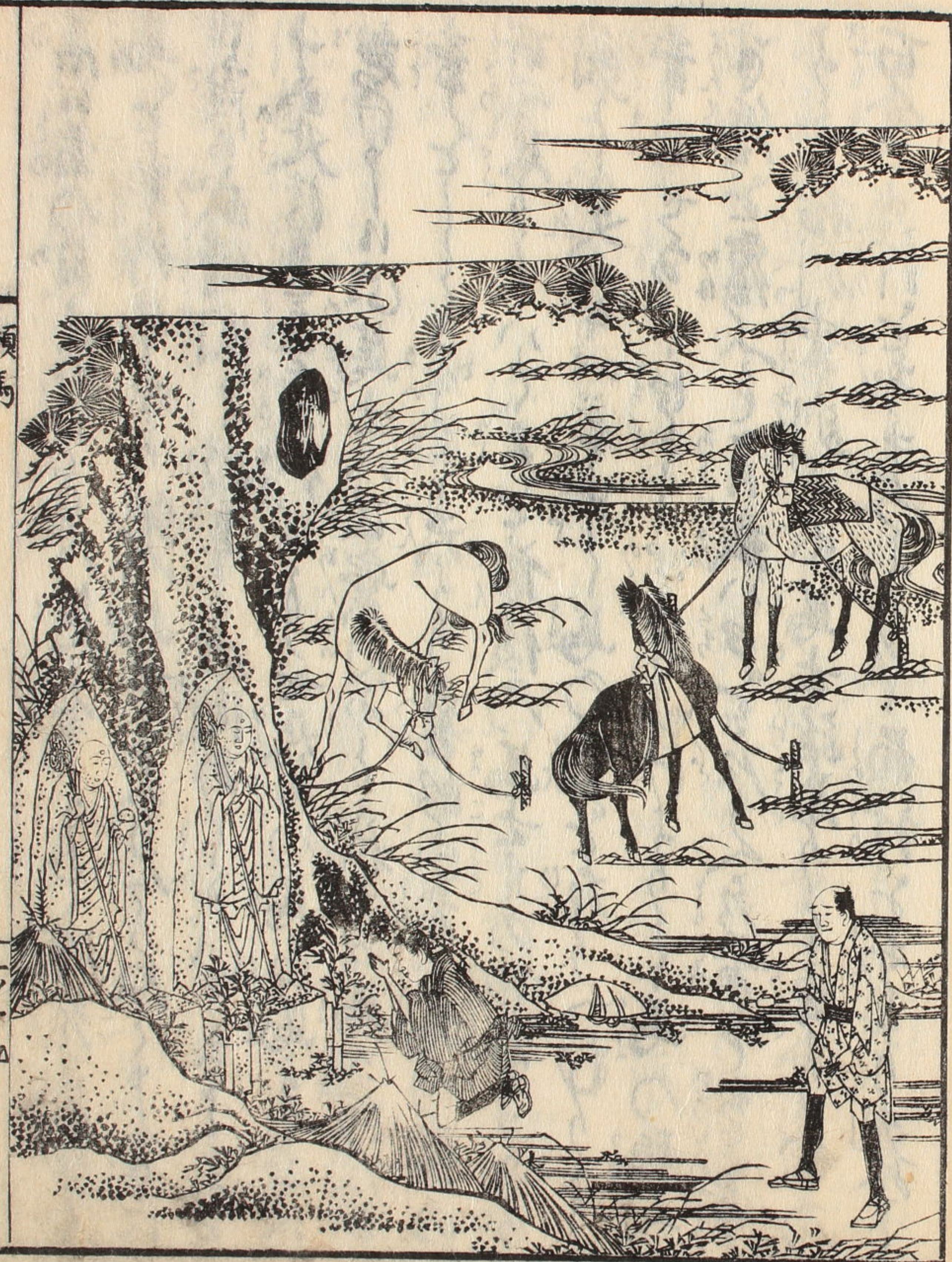


連り當り申す私のかげらも無り申す馬と白  
月毛と冊目馬と四座のり  
又他の馬とけしと見えたりと回り近村の  
合の野の馬の美ともある所四座の馬の美も  
ありて愛活しく居申すとも二十間計り向り  
驚き有り馬頻りりり野なきりりりりりりり  
河まゝあれ馬が河のやうなる事ともあるや  
るものりく原風とたふもわく覺き死す馬士  
とて懸附を走らせ仕方のり物樂と  
うギバのりけしと云ふともぬり又情のりま  
回し者振りと出さしと覺申すも白の美を  
尖めり皆く顔又まきりりり馬と牽ゆりりり

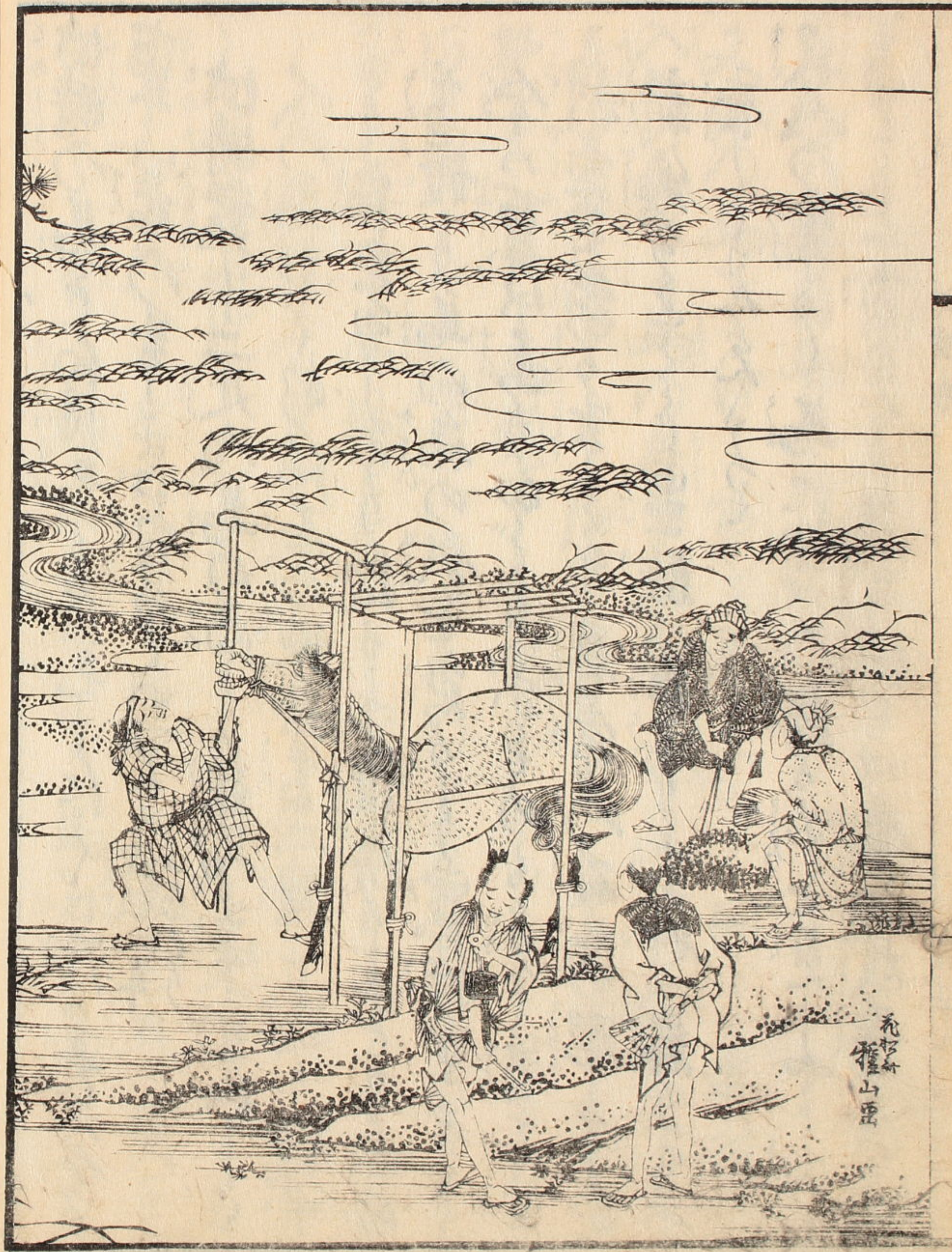
は時の馬と白月毛と月毛とたふと四座のり  
七年の事と申すは心付ゆといへり 文政九年  
は時究一正の馬のありて馬士申す加  
人の丈わりの石の地産言二體と遠り野中  
り安直あり申す物りり維始りりりりりりり  
言體り馬の病の死と無りり靈験りりりりり  
今八百度ありりりりりりりりりりりりりり  
利益と蒙る事と我尋常の石の彫りりりり  
新像りりりりりりりりりりりりりりりりり  
事りりりりりりりりりりりりりりりりりり  
又人の事ゆり馬にギバの無りりりりりりりり  
りりりりりりりりりりりりりりりりりりり



頼馬



十九



花  
山  
田















修治の目よき人ぞうかといふも是を馬ハ断て挿の  
ゆきまきより大目小英國に挿る成事しきまき  
つり

予或高きりし言秘密の法也〜授りきりかは  
教めく梵書と書く馬の鼻のあつとをとお拂く  
魔と添く法有 ギバハ馬の鼻 竹葉の二十六會よ表  
〜二十六節有葉のりてハ切換り〜の傳めく  
理と極つる事ハ編る事と何葉の〜と至り  
巧拙り事づ〜と欲う根の事ハ席上の切者より  
み〜ハ回よ合ぬもの之歳度と事に〜と欲  
得りよ〜とれハ真の切者ハ謂が〜と欲  
又伽婢子後篇 寛文年間 白尾濃後遠冬別の回り

挽馬風〜と色有里人成〜とまにま成ハ馬成  
幸〜に旋風を〜と巻籠〜と成  
馬の前りたらめり車馬の場物も〜と如  
〜と旋風大よ成馬の〜とりめ〜と馬の鬃  
〜と〜と鬃の中細き糸の如く色赤と光  
色馬頸りよ挿るいさハ彫〜と〜とらに梵書  
〜と風其時を〜と添り〜と何成その業  
知人〜と若旋風馬の〜と度〜と時〜と刀とぬき  
馬の〜と挿ハ光明美言と呪も〜とを去風散  
先〜と馬と恙〜と挽馬風〜と去〜と  
謂ゆ〜とギバの事〜と目〜と是〜と見〜と  
尾濃後遠冬別の回り







其内同友新沢等

實名忠雄馬術の隨心流にして門弟を多く  
馬の事には其心と祝ひ能く英哲なり

の況しハ頼馬とて馬の卒死とてふと云之馬の  
ふく心也頼の字のこふくとも崩るくとも  
かつるとも判むなり折ダイバの況區こ也一況  
大魔り記とて神雲中より飛る時ハ馬眼と塞  
進む是ともむ早むまば鞍下落者む創あり  
馬の如くみく糖と兼むと想身直立不又精神  
乱まると死るありと云昔天文六年其六月廿四日  
將軍家 足利三代將軍 畠山修理左又義忠とて  
愛宕山へ代系ノ使と遣とさふ下向の折くつ  
松の色くく一女忽然と来り畠山が宗馬の糖と  
執りて殺すくひく馬忽り創を死くたり

と云りはダイバと云ハ神の魔障の来ぐ毎ハ糖と

秋夜是易の死り見えたり其餘頼馬の況救多

有河もく汁へ糖とて高山義忠が遣ハ

そりく一女と若松が見ふ所の怪女ハ

似たり是木の事ハ諸國遊歴く尋明め

重く人々も心得をせ夜来也又無人傳

みくハ支江一難と業也を國りく

は怪は遺ふ所とて多とて我國名古色り

甚希あり事く人々

行某馬トリ其馬をく兼ふゆふ事也  
其馬の事ハ又馬をまきく故強く馬の氣と破るハ  
餘の道と兼ふりく馬の死せハ文化津仲の事ハ川澄  
ありてギバがけく馬卒死せハ文化津仲の事ハ川澄  
の藝ハ秀る人々馬を好む者其人ハ馬の能く能く  
ハ怪を避ふか之藝の徳故とせんゆふ事く







如何なるもや 園をさぐりてハ 跡り多かり

萬蒲の根葉と化しては幸

板倉桂意 庚辰の去 依家の口 後所行り 其男 桂舟未

少年のころ 文政七年 申 六月の幸 行り 行而えん

桂舟り 其の物 河り 桂と尋ふり 極の下り

古き 跡あり 取し 見まじ 梅 萬蒲雪の 下たご

桂 其の 皆枯る 去と 乾く 其の 形ち 其の 物 跡

亦 明も 其の 中より 奥の 形ち 其の 物 跡

そり 跡 人 其の 萬蒲の 根の 盡め 其の 桂舟 去り

驚き 其の 又と 嘆び ぬは 時 桂意 八朝 飯と 喰く 跡

色 其の 見り 見り 其の 根葉の 形ち

取 其の 故 水の 申入 其の 見り 其の 形ち

出来 其の 尾 緒と 其の 一時 其の 形ち

間 其の 其の 水 中と 其の 其の 形ち

少 其の 其の 其の 其の 其の 形ち

見 其の 其の 其の 其の 其の 形ち

其の 其の 其の 其の 其の 形ち

風 雨と 其の 其の 其の 其の 其の 形ち

其の 其の 其の 其の 其の 形ち

其の 其の 其の 其の 其の 形ち

其の 其の 其の 其の 其の 形ち

其の 其の 其の 其の 其の 形ち

其の 其の 其の 其の 其の 形ち



















人の心でそと毎へごとく皆く一毛けりて後に成居  
きふかり花の如く一掃とのまう捨ひ給るるに并中  
の奇なりとて感あり甲別へのま吹く  
六月の末より白毛降し四すより二定よるびるる  
所の竹も夜明け程と毛とつて支の諸國の  
事と尋ふかり五畿内へ東國へ悉くゆりて又  
あごと降しふ事ハ怪りて安とてど横別へハ  
ぬく安くも余也何國とゆくとハ地安行ふ  
しとあむ残り多し江戸ハ六月十八日の日  
降別表城平ハ六月の廿九日よりゆり名吉屋ハ  
七月の八日七ツ時より壁相とあり降しとて二三  
の間ハゆりてとて間ハ進く毛と捨ひたりと安

皆毛ハ國ハ事ゆりて甲別ハ白多く名吉屋ハ葉と  
異多く白ハ少しとの事也其とも毎へごとく事  
降ゆふ日の東西前後ゆふと又つづき事ゆり  
和漢合運り慶長九年京師畿内関東諸國降毛長  
四五寸同三年六月四日降毛長四五寸  
又或記り寛保三年七月十六日夜毛降  
安永六年二月伊勢尾張毛降その日の落首  
奇なりとて見たりと  
天明ゆも余國ハ志とど江戸ハ毛ゆりたるにお遠  
ゆり古き人ハゆりありてりて時降しふ毛あり  
しとてゆりてりてりてりてりてりてりてりてり  
精し洋ゆふ筆記と見むとゆり多し唯南結

毛ノ降

一ノ三十二



北窓瑣談より記す。ふかのうき妻くくく記す。
   
 今全交とたり記す。
   
 水島瑣談の巻。貞政三王年七月十五日。戸小雨降て
   
 其の中より毛とゆきせり。丸の月廿八日。列く多うり
   
 一尺二三寸とゆり。色赤く。たましくゆり。
   
 京へも親く。き人より拾ひ。丸く毛と送り。
   
 勢が馬の尾のゆき。その毛ゆり。に戸中に置く
   
 降り。一率。竹。秋乃毛。ゆき。幾万疋乃毛あり。や
   
 下。不審。乃率。ゆり。成。ま。今年。の毛。色。以。時。の
   
 毛。今。目。下。率。ゆり。又。次。り。出。ま。隋。の。時。り
   
 降。ふ。か。も。回。お。と。目。ん。也

漢書より。天漢九年三月。天雨。白毛。三年八月。天雨。白
   
 鰲。鰲者。毛之強曲者也。

又晋書より。泰始八年五月。蜀地。雨。白毛
   
 又隋書より。開皇六年七月。京師。雨。毛。如。髮。尾。長者。三尺
   
 餘。短者。六七寸。是年。關中。米。粟。貴

相。け。天。保。乃。中。年。ハ。其。敷。出。来。ま。ど。く。甚。微。塵。よ。及。び
   
 之。り。天。明。乃。頂。と。各。列。乃。帆。儀。ゆ。き。者。り。右。隋。乃
   
 開。皇。年。く。今。回。松。ある。と。偶。中。せ。し。もの。け。外。漢。去
   
 少。と。性。く。有。と。史。若。邦。ゆ。き。も。ち。や。有。率。た。る。ん
   
 淺。見。故。志。ぬ。事。乃。之。竹。ゆ。き。せ。よ。不。思。後。乃。事
   
 乃。り。依。く。予。規。よ。見。史。る。浪。り。と。要。後。記。一。並。ぬ
   
 白。蛇。靈。異。と。記。した。事



























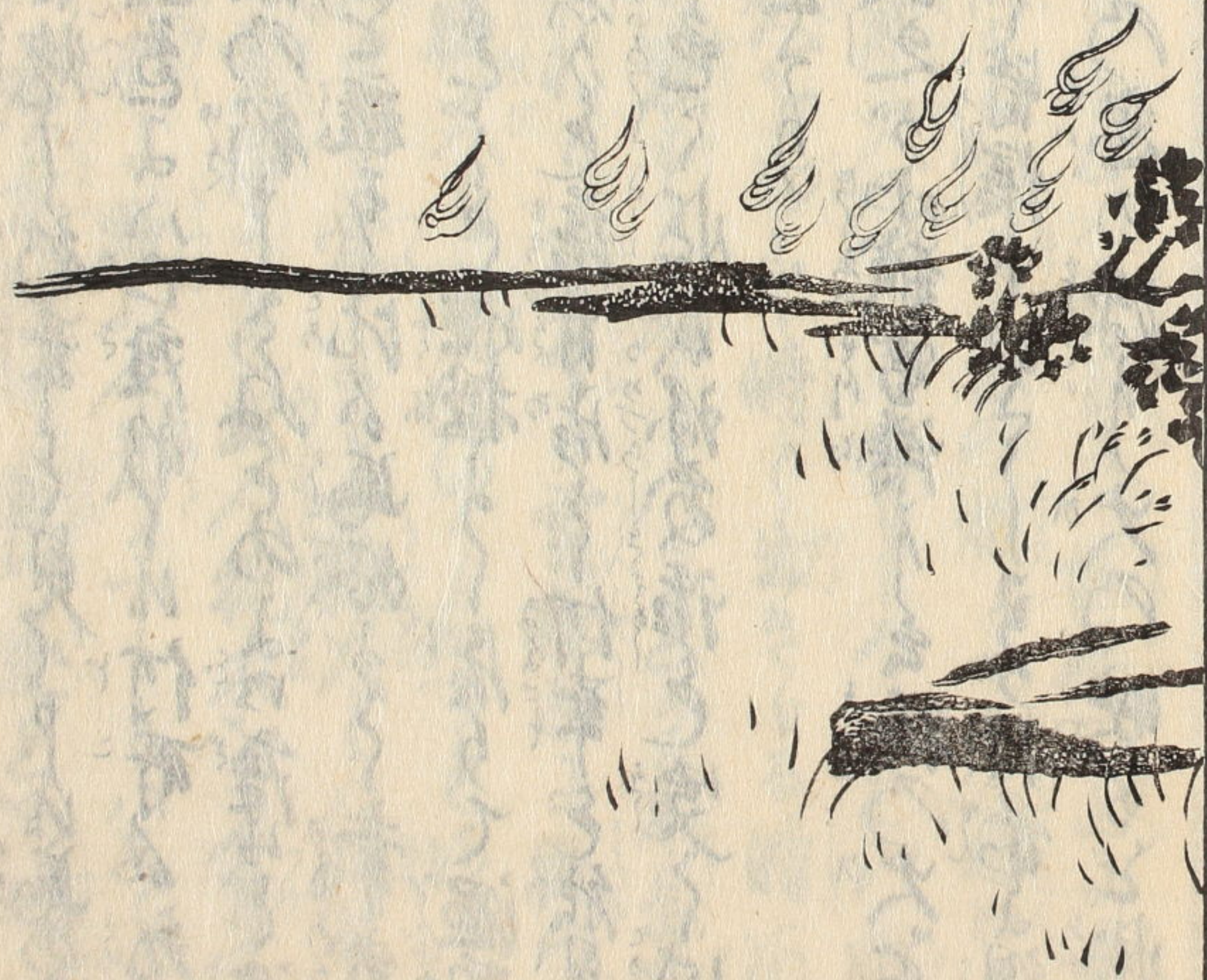
東く大谷の初列り登りて是を誦めく能考ゆへ  
机より山登りて澤の田舎ハ一節道よりハハ手疾乃  
中ハ誦や先ハ村へ歸る者ハ山登り外ハ是なる  
そのハ一人ハ山登りてそのハ樹道をりて  
是よりハ大谷の世初ハ若と世初ハ  
半月と前ハ先福山登りて馬と牽登りてそのハ  
兼く存まり居り奉り山登りてハ  
後中り有りと顔ハ机よりハ人々のそのハ  
しう怪ハ見届くうと顔ハ機と人々の何も  
少くも替りて奉りて山登りてハ何と何と  
潤声ハ山登りてハ大谷ハ大谷故心持居て  
うハ機乃初列りて馬と傍へ引込居りて

きく奉りて山登りてハ機乃初列りて  
大谷の初列り登りて是を誦めく能考ゆへ  
机より山登りて澤の田舎ハ一節道よりハハ手疾乃  
中ハ誦や先ハ村へ歸る者ハ山登り外ハ是なる  
そのハ一人ハ山登りてそのハ樹道をりて  
是よりハ大谷の世初ハ若と世初ハ  
半月と前ハ先福山登りて馬と牽登りてそのハ  
兼く存まり居り奉り山登りてハ  
後中り有りと顔ハ机よりハ人々のそのハ  
しう怪ハ見届くうと顔ハ機と人々の何も  
少くも替りて奉りて山登りてハ何と何と  
潤声ハ山登りてハ大谷ハ大谷故心持居て  
うハ機乃初列りて馬と傍へ引込居りて











唯へ来りし捨りし合長行りしとて英け骨の首板  
もくハ敷十丈奇合焼一初事と見りし馬の骨も  
あの板り多く逆色ハハ四座の竹所ハ丸来り  
中ら其くも合長の行りしとてハ四座の竹所  
ハ吉松ハ淑母の儀と難る比ハ馬好く幸事行て  
あご若くやハ竹所とて性根うく居りて温順よ  
し〜勇氣も有る〜落付居〜何事と能見窮め  
う〜貴〜居〜故色〜住成採安活とて〜は筆記  
〜とて〜記〜並〜り  
靴火の事ハ鈴木牧之がハ靴雪溝〜云靴火と為る  
説ハ〜ま〜河〜と皆信〜が〜目〜前〜親〜ハ  
或夜深更〜二階の窓の深〜火の映〜と候〜

その隙間〜と〜明〜と〜ま〜ハ靴雪の怪揚のよ〜と〜  
〜より火と出〜と能〜れ〜ハ長〜の燃〜之〜態〜は〜り  
〜と〜り〜燃〜事〜寒〜火〜の〜〜〜り〜る〜色〜ハ〜  
〜と〜居〜り〜〜〜と〜出〜る〜時〜何〜り  
〜と〜が〜肚〜中〜の〜息〜は〜寒〜さ〜る〜の〜〜〜ん〜ろ〜と〜が〜刺〜さ〜常〜よ  
〜と〜の〜さ〜る〜ハ〜勿〜論〜何〜り〜石〜身〜が〜雲〜根〜志〜ハ靴火のむの  
〜る〜事〜と〜云〜〜ガ靴火をむのひ〜〜〜〜河〜び〜  
靴火のむ〜と〜云〜物〜の〜光〜る〜と〜常〜よ〜ハ靴火ハハ列〜る〜下  
〜と〜〜ハ素昇の〜一宵活〜と〜或〜人靴火と〜合〜付〜て〜襦  
〜と〜〜〜道〜と〜遠〜行〜ハ靴火ハ人〜来〜る〜〜〜ハ〜  
〜ハ三〜三〜丈〜叢〜祠〜の〜廣〜前〜〜〜通〜つ〜通〜る〜と〜と〜限  
〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜



このハ渠がもてヨウと飛ぶ時の中よりフット島  
柴が島大のどくとうくと先の大橋より二三  
うく先の大橋を渡り又さる事なり勢よまヨウト  
おと時つちちた遠方よりこまバ明滅以續  
まると埋りけりさる事ハ皆正安記に松野人  
あび元来出まへと事ハ然くとも事之去る  
又我聞くとと大橋ハ馬の骨より焼く事美濃  
うくと信り事と回法けり又回と養濃の月くも  
南本意乃ち信ハ馬乃仇く大と焼く事と信り  
う馬乃仇ハ馬の交治うと事又予が知る人房州館山  
藩中も梨竹某の云く又ハ焼地と好く山橋も  
ちくろが秋の夜思ふ事ハ信りたるハ焼地と焼く

信く小倉の方へあるま例へ引舟く赤丸と侍居る  
内り逆ハ物ハ何公のく小倉の下まぐある故焼地と  
元来赤丸と思ふハ物と焼く事と知るハワイと声  
呼びく御来より聖朝を呼びく馬乃骨ハ骨  
まると信り云へり物大ハ馬の骨より焼く事と  
信りくハちりりく事ハ先ホとん考りよ事と  
骨と丸と色くの焼く事と考り量りけり  
人の金と標多と事よせめ教さる事  
附出さるひの事  
信勢乃國河乃津乃南の方よ雲津と云鳥河り或  
家家のも代供人き人石連主人の代系り







養生いんじやう〜〜具し此こ也や〜〜  
の事こと七日ななひ目めりり養生いんじやうの毒どくりり高たかりり〜〜粗ろひひ死しりり  
死しききりり〜〜是こゝハハ寛政くわんせいの末すえつ方かたの事こと〜〜我われホホ  
其頃そのころハ伊勢いせの津つり居ゐ〜〜危あやりり沙汰さた〜〜現ありり  
支那しな〜〜事こと〜〜疎そりり三別さんべつの仇あだ之の時ときの成なり事ことと  
りよりの事こと次つぎ津つりり事こと〜〜あり〜〜ううババはは養生いんじやうの集あつ  
りり〜〜と見み〜〜身みと連つりり〜〜と牛うし込この  
松源寺しょうげんじの先せん方かた丈ぢやうの世よのりり〜〜人ひとの靈たまの物ものよ  
變へん〜〜〜難なんととの事こと事こと疎そ〜〜〜と近ちか〜〜と江え戸ど  
四谷よつや〜〜お岩いわと云い婦む女にょ育いく〜〜崩ぶと云い丈ぢやうハハ業わざりり〜〜  
ま〜〜彼か丈ぢやうと長持ながぢ〜〜〜減へ〜〜に長持ながぢの中なか〜〜  
崩生ぶつせいせ〜〜との事ことハ四谷よつや怪談かいだん〜〜歌うた章ぢやう妓ぎ狂言きやうげん

〜〜と仰おほりり童どう姿さ〜〜人ひと能あたるる事こと〜〜塵ちりりり〜〜  
〜〜ふら〜〜ハ三井寺さんせいじの頼たの家け河か間ま架か崩ぶと云い〜〜  
叡山えいざんの徑ぢやう巻まと嘯せう荒あ〜〜ふら〜〜と何なにりり祭まつり〜〜  
りりの縁えん菟う屋やの身み〜〜養生いんじやう婦ふの故こ〜〜靈たま養生いんじやう也や  
りり〜〜若わか〜〜め逐おりり死しよよと云いりり〜〜と出で於およよハ  
思おもハハ〜〜か勇ゆう人ひと武ぶ人ひとよよと云い甚し愛あい婦ふの思おも〜〜との  
ま〜〜多おほ〜〜目め前まへの理り〜〜ハ養生いんじやうりり難なん〜〜  
予よ〜〜後ご天てん保ほ九く年ねん伊勢いせ勢せ路ろ通と行ぎやうの時ときの養生いんじやうの事ことと  
身み〜〜〜云い津つ高たか〜〜ハ何なに〜〜雲う津つと松まつ坂さかの  
間ま〜〜木き村むらと云い庭てい場ぢやうの事こと〜〜今いま中なか村むらをを意いを  
か〜〜云い庭てい場ぢやうををりり向むかひひ〜〜と下くだりり〜〜家いをを  
断た〜〜〜と云い跡あとをを畑はたけと云い成なり居ゐ〜〜りりはは法はふをを勢せい別べつ





西村  
印

うへ今よ〜とつひ傳え誰あ〜ぬそのとめさ  
 事たち色どと早少〜年経〜事ゆゑも色り  
 ともく板〜と怪りあ〜るの少〜御〜予の  
 駕籠と異〜ふ人足の吐〜ハ私の親せの能存居  
 て度〜吐ハ水り中ハ尋常の黄〜りハ餘程あま  
 黄〜〜色ハ登〜も色天井〜りともま〜間水〜  
 一〜り〜ま〜り居〜りとの事〜は危〜とい〜り  
 江戸兵隊町〜筆墨の汚用と物〜安夜卓筆  
 と云者も予〜が怪〜と記〜〜事〜と具〜て  
 云〜我木が實〜ハ伊勢の國〜り物〜者  
 り〜は黄の怪と能存居我木〜り系  
 云〜とのま〜時〜久米村の建場〜右黄の

陸奥

一四七



懐美と必支拂り〜悪報の来ふ事と心は並べ〜  
志のさる〜故其去地〜約〜能支打〜前案に  
有〜教〜少〜と違ひを〜七月在辰と成〜  
家の棟〜雲山の如〜と集りて〜きり〜と湯か〜  
あ〜と悪人の連〜り〜と安の根〜成〜家  
う〜と敷屋の内〜り居る〜と鳴呼怪難や〜と云て  
其雲の集り〜と安の如〜と揮立〜成〜若〜  
〜と事〜と安来り〜とせ〜と由怒り  
予に若ふ者〜と予思〜り〜と歌舞妓狂言妙〜  
鬱念と晴さん〜と出雲出〜と情ぐる〜と恨ま〜者  
とと通〜りの安と成〜若〜と事〜の元人  
見〜と初居る事〜の事〜と却〜と智者人種

粗云故形ハ面白〜作り〜あふ〜この〜思ひ〜心  
の〜見〜と人々〜と云は雲の集り形ちの  
通〜り〜悪者〜の若〜と事〜と見〜と歌  
舞妓の狂言と能作り〜と事〜と安〜と也  
用〜と云あ〜と事安〜と云の首〜の〜事保の  
〜と口先〜と勤〜と〜と終本氏ハ想〜と百合の  
花と蝶の〜と〜と或時茶会〜と〜と四人集り〜  
打柄ぬお出〜と行〜と若〜と死〜と終本氏ハ  
跡の外心ち〜と〜と悪友若〜と死〜と  
至人〜と向ひ若〜と吸物〜と百合の根〜と〜と  
や〜と同一〜と人〜と兼〜と婦人〜と事  
の〜と玉振の品ハ曾〜と〜と挨拶〜と〜と



けかぐ一度のゆり箱の控指し百合の花と絵  
書きよから有つり人々驚く早速其指と引を  
くまへ速く取り扱へ成りし一耳袋と云はるに  
見えたり又去る能別殿の書指し相行其云  
者の扇指し成事と目書きし委及書記有  
又河波の徳鳴り糸子ぐらと嬢ひつと甚ど  
恐る者有或時餘人歎きたり其人へおとあ  
付つたりたりありの目首りありしと云ふ  
腹より内腹出しと云へ難儀せし事有る右  
藩の入りより水より波音迄一連或人の活せし  
前の百合と目と類し予が志せる人よと毛虫  
さしひ首く若天井のむぐに一丈と云ふあり

居の席へ入るをぞめくもむもく暗りき  
此竹成酒家遊具の面白き席うく居るえ  
兼ふこの事と上座親交相友り出づりひ成  
奉りおるり遠ざかりの箱生平太所が別強  
うく山か立所在りしと魔王の類の大怪り  
出合し少くも心たもまごきと怪怪のあか  
生得嫌ひ成蛇別と出しきふさるハ筆をさ  
魂と云ふゆふけり成りし事ハ箱生怪談  
海りもこの弦巻おりし者く人のある事  
ゆりし童蒙の時或人のホも蝶の嬢ひ成  
児童者か常く滅の敬おつと替りに蝶と  
持身か云へハ恐まおのいごく後入事也か







昔大藏乃大吏藤原乃清廉と  
 りん者少く猫と恐まきり世乃人  
 猫忌む乃大吏とぞ名付けり此清廉  
 山城大和伊賀之箇國は田と多く作  
 兼量と徳人のく有よ藤原乃輔忠朝臣  
 大和乃身めく河の時りて國乃  
 官物と僅後をまきと老や角  
 りて清廉出まぐるまて灰毛  
 斑たる猫乃大いゆるかみ  
 まぐそ形へ入ると清廉  
 目より大いゆる涙と落して  
 迷ふとみ乃猫清廉が神とらと

一雅筆  
  




ま乃南彼西の南とをり初め  
 清廉を之替りて  
 堪兼の故先猫と  
 退らるとバツ  
 乃猫鳴合音  
 耳と書くと  
 清廉行あり  
 よ成ゆえ  
 やぐくそ度  
 りあ大和の國  
 宇陀の郡の家り  
 河の稻床の下書と書せし宮物と  
 出させし奉今書物語りあり





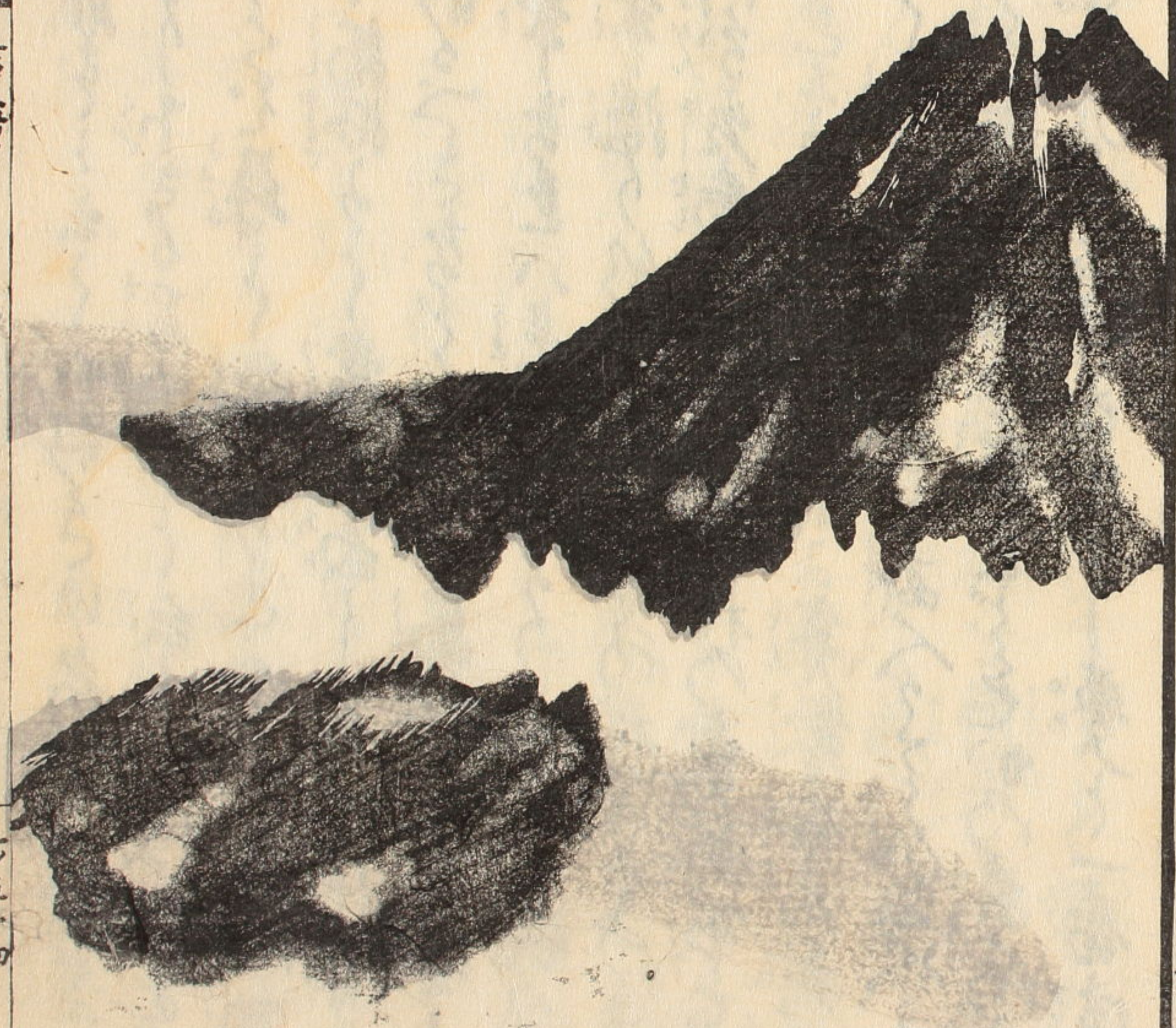




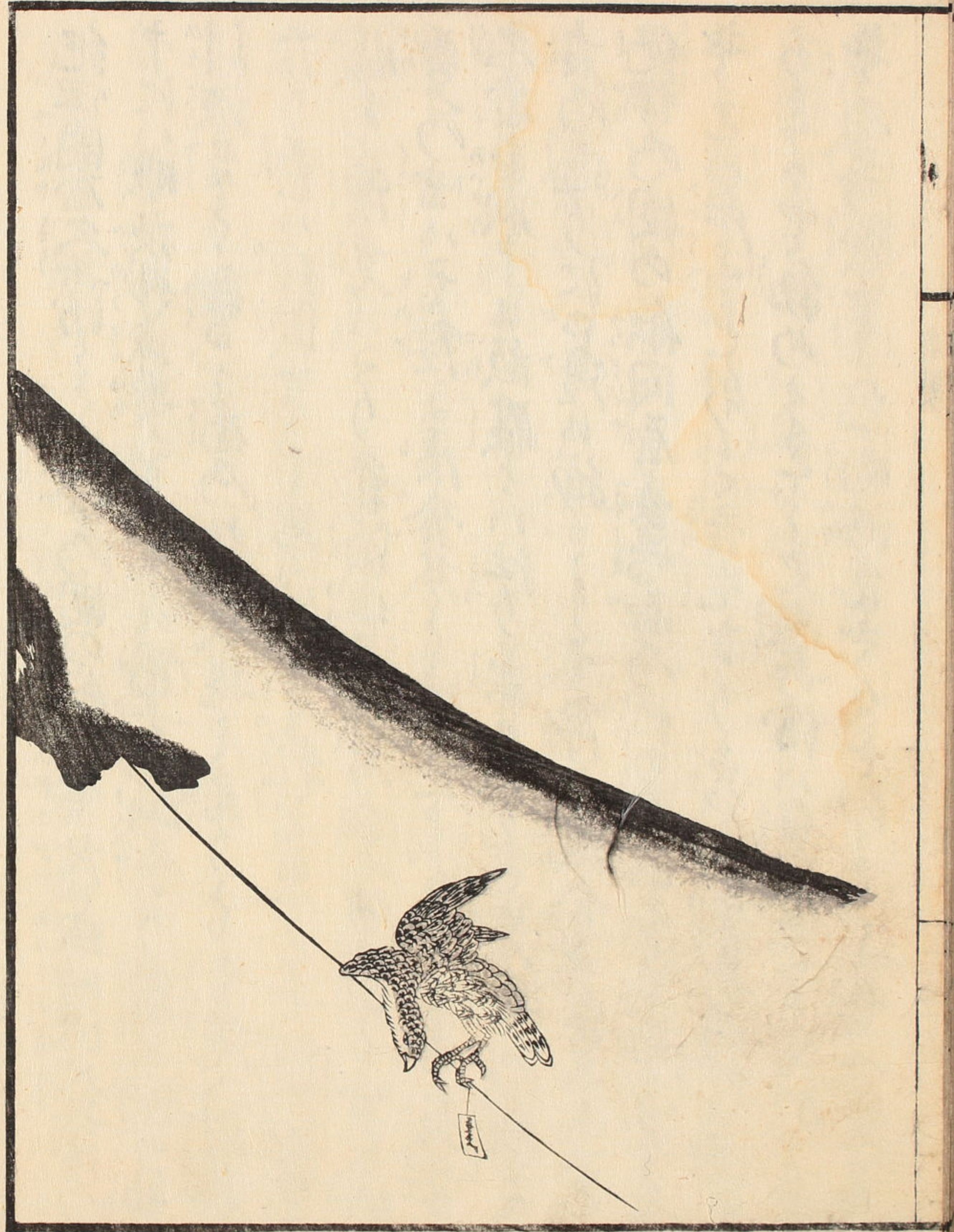




吉夢



一五十四





夢ぐ事よ恨むと云く心形とゆ名か乃代の者たひ  
ま番と我あり下さるる委つと云く何をもせざるを  
とちなりほくく母く味めらまのく言へぬあは代  
乃者いむく富好よく常くあり付風に付くを  
是ぞ貴光のるづきちあぐくく富れと穿鑿し  
米ふ粒の事たまは是ぞ天より赤ふは換りる福  
くく心づ事浪りぬく悲りくそのれとまづく心  
くまきと何分なる番のれく富れの賣捌而も救世  
あるまく己まき人うくハ一時は穿鑿出来ぬゆ名  
己とあるく富の好ぬの友とあ人くくハ人して  
申端くまぐ悲く母の事まきとこの夢の番附の  
札ハちく母とびく詮方ありく夢と一番遠いひの

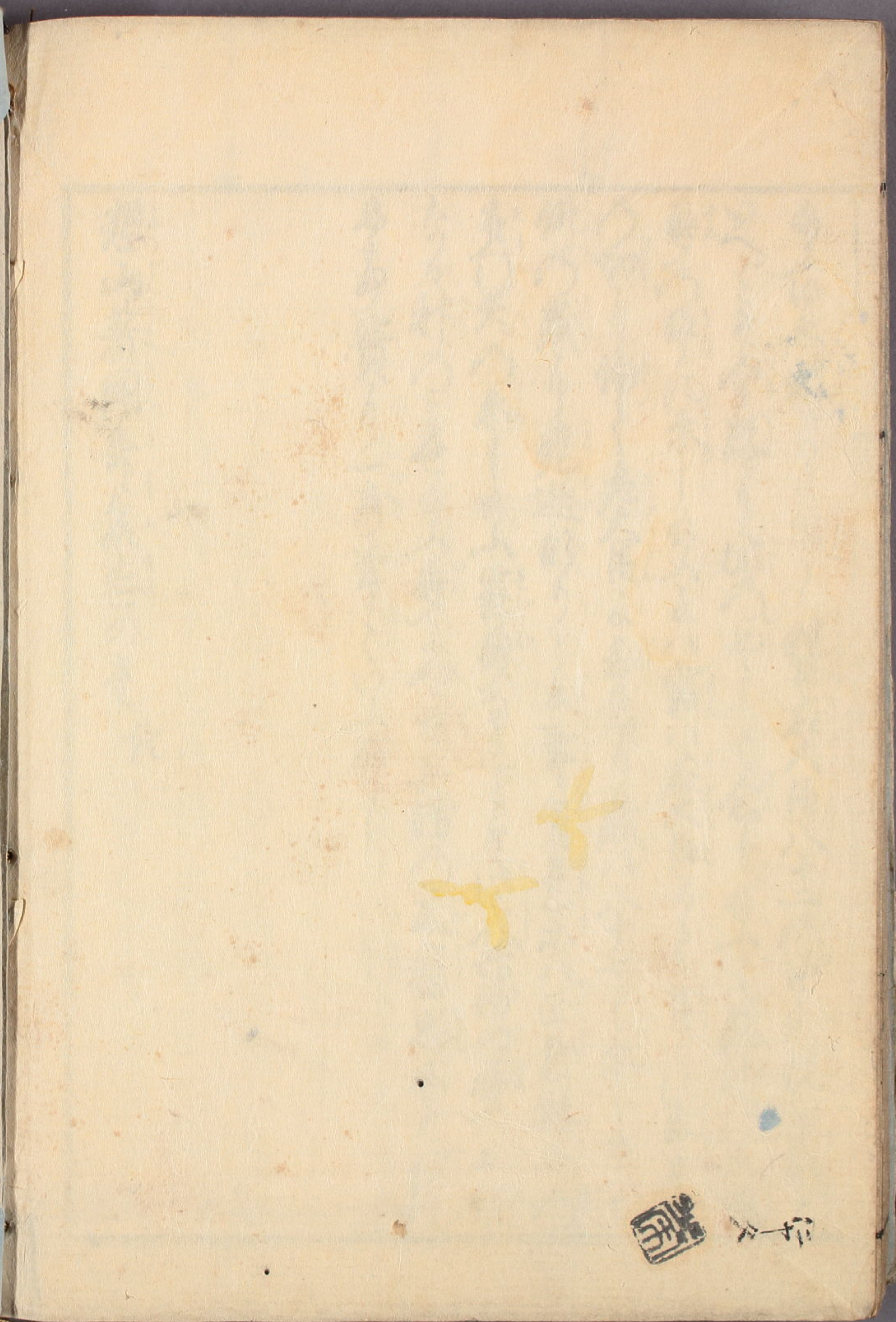
札と貝付並くる故せめく河のれありくく買丸  
くく測るれと買丸く富興のと侍居りり彼夢の  
あご賣一たん百あり富り札と成る故代の者乃米め  
一札と一番遠いるまバ袖札と成く怪るあまら丸  
中山は現在私存居りハ事うく何よと合点の  
初ぬ事何ぐく事のまぬとの不思議とくく者との  
うく心度ゆくと市兵清治りきり予ありよ昔栗田の  
大臣立御云あぐ六位の時鞍馬寺よ藤り強ひく  
御帳の内より笈と強ふと夢よ見あひハに笈よ在  
從二位在御とあまきりり後其夢のゆく大臣と成  
あひくく事あり又或書り右大臣歳八十二と云  
強く後意のゆく昇進くハ十三の時大臣よ進



あふゆ念彼寺よ清く性日右大臣八十二乃由尔現と家と  
とどと今既りけの如くと念トあま民沙門天赤  
夢の牛に赤いあふハ官ハ右大臣うく有ハ年未勤  
乃切り後々た大臣よむより歳ハ八十七と赤いあふて  
件乃歳り堯逝のりと云事有是ホハ正安鞍馬の  
多門天の赤いあふ靈夢うもとけ之共清の夢ハ何  
ちの神のとせの夢もや市兵清の不審思ふと理り  
あまの實り一奇事とりの一奇

想山著因奇集卷のま 終





Small black square seal and handwritten characters in the bottom right corner of the right page.



